林芙美子は
「放浪記」や「浮雲」などの傑作のほか、
「清貧の書」「晩菊」「骨」など
珠玉の短編小説を遺しました。

その林芙美子にちなみ、
2014年（平成26年）、中・短編作品を対象とした
「林芙美子文学賞」を創設しました。

この文学賞をきっかけとして、
新たな文学の才能が世に羽ばたくことを期待し、
広く全国から作品を募集するものです。

林芙美子
ヨーロッパから帰国後転居した、下落合の和様式洋館にて［昭和7年頃］

「林芙美子文学賞」創設にあたって

「心を噴きあげるようないい作品を書きたい」と願った林芙美子は、生涯庶民に寄り添い、庶民的作家として昭和の激動期を駆け抜けました。

林芙美子は1903年、行商人の子どもとして門司に生まれます（下関誕生説あり）。その後、尾道の高等女学校を卒業して上京。関東大震災や世界恐慌による不景気で定職にも就けず職を転々とするなか、彼女を支えたのは書くことでした。

「書いている時が、私の賑やかな時間であった。男に捨てられた事も忘れたし、金のない事も、飢えている事も忘れた」と。このころに書いた「放浪記」が思いがけずベストセラーとなり、その印税で欧州にも行きますが、時は日中戦争から太平洋戦争へと向かう暗い時代でした。

「ペン部隊」の一員として従軍しますが、敗戦。庶民的心情から戦争協力を惜しまなかった過去への自責と呵責の念が、時代の証言者としてペンを執らせます。

戦後の悲惨な現実と、人間の過酷な運命を描きながらも、その作風は生の深みに思いを潜め、しみじみと味わい深いものとなっていきました。

ひたすら書き続けた芙美子は1951年6月28日急逝。47歳。

芙美子の作品は、時代や運命に翻弄されながらもたくましく生きようとする人々を支え、勇気づけ、今日まで読まれ続けています。

文学の力を信じて、林芙美子文学賞を創設しました。

原稿送り先・お問い合わせ

〒803-0813　北九州市小倉北区城内4-1
北九州市立文学館「林芙美子文学賞」係
TEL. 093-571-1505　FAX. 093-571-1525

林芙美子文学賞　検索

選考に関するお問い合わせには、一切応じられませんので、ご了承ください。

第十三回 林芙美子（はやしふみこ）文学賞

作品募集

主催／北九州市　協力／朝日新聞出版

● 最終選考委員 ●

撮影：三原久明

井上 荒野

撮影：三原久明

角田 光代

川上 未映子

第十三回「林芙美子文学賞」

募集要項

文芸の領域を広げる、才気にあふれた作品を期待します。その形式については問いません。

応募資格

○年齢、性別、職業、国籍は問いません。

応募規定

○日本語で書かれたオリジナルの未発表作品に限ります。（ただし、第12回林芙美子文学賞の締切（令和7年9月12日）以降、同人雑誌など、商業出版ではない形で発表された活字原稿は、選考の対象とします。）

○原稿枚数は横長縦書きで、下記のとおりとします。

手書きの場合	400字詰原稿用紙で70枚以上120枚以内。読みやすい字で書いてください。鉛筆書きの原稿は不可とします。
ワープロの場合	横長A4サイズの白紙に縦組で40字×30行を1ページとして印字し、23ページ以上40ページ以内。

○応募作品には、400字以内のあらすじをつけてください（あらすじは、原稿枚数には含みません）。

○本文原稿には通し番号（ページ数）を入れ、クリップまたは紐で綴じてください（ホッチキス・糊留めは不可）。

○同封の応募用紙に必要事項を記入の上、作品・あらすじと一緒に送ってください。
用紙がない場合は、作品に表紙をつけ、①題名・ふりがな、②氏名・ふりがな（ペンネーム使用の場合は本名を書き添えて下さい）、③生年月日、④住所、⑤電話番号、⑥E-mailアドレス、⑦略歴（学歴、職歴、文筆歴）、⑧原稿枚数 を記入してください。

○参考文献・引用文献、生成AIの使用については、末尾に記載してください（原稿枚数には含みません）。

応募規定を満たしていない作品は、規定外とし、選考の対象にいたしません。

募集要項及び応募用紙は北九州市立文学館のホームページからもダウンロードできます。
https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/

応募締切

令和8年9月11日（金） ※当日消印有効

賞

大賞　賞金100万円　「小説トリッパー」（朝日新聞出版）に作品掲載
佳作　賞金10万円

発　表

○受賞作品は令和9年1月下旬に発表予定です。選考結果は、北九州市立文学館ホームページで発表します。
なお、受賞者には直接通知いたします。

注意事項

○受賞作品の著作権（著作権法第27条及び第28条の権利も含む。）は、北九州市に帰属します。受賞作品の出版等については、北九州市が利用を許諾し、条件を定めます。
○応募作品は返却しません。
○応募後の内容変更は受け付けません。
○作品の選考についてのお問い合わせには応じられません。
○応募者の個人情報は、本文学賞に関するもの以外には使用しません。
○二重投稿はご遠慮ください。
○事前選考（一次～三次）通過作品の題名、氏名（ペンネーム）を北九州市立文学館ホームページで発表します。二次選考通過作品の題名、氏名（ペンネーム）は、「小説トリッパー」にも掲載します。
○大賞受賞作が複数ある場合は、賞金は配分します。

最終選考委員より

井上 荒野　*Inoue Areno*

ほかの誰でもない、あなたがそれを書く意味。書かなければならない意味。それが伝わってくる小説を読みたいです。求めているのは言うまでもなく実体験などではなく、小説とあなたの心の奥底とを繋ぐ通路です。どんなに荒唐無稽でも、シニカルでも残酷でも、ハッピーエンドでもバッドエンドでも、小説となるためには、その通路が必要です。まずは奥底を覗き込む勇気を。そして、あなたがすでにわかっていることは、私もたいていすでにわかっています。わかっていることだけを上手に書いてあってもつまらないです。わからないから書くのです。そして私は答えを教えてほしいのではない。答えを知るために奮闘している小説を読みたいのです。

2008年『切羽へ』で直木賞受賞。ほか、『潤一』で島清恋愛文学賞、『そこへ行くな』で中央公論文芸賞、『赤へ』で柴田錬三郎賞、『その話は今日はやめておきましょう』で織田作之助賞を受賞。高齢女性のシスターフッドを描いた『照子と瑠衣』が話題に。最新作は『1+1』。

角田 光代　*Kakuta Mitsuyo*

林芙美子はのびやかで正直で、地に足の着いた小説や随筆を書いた作家だと思う。そしていつも、なんだか愉快な感じに新鮮だった。この作家の名前が冠された賞ということで、林芙美子作品をそんなに意識する必要はない。けれどもたったひとつ、この新人文学賞において、林芙美子作品の持つ肝の据わったあたらしさは読みたいなと思う。

あたらしさというのは、奇抜さや突飛さとは違う。じゃあ何か、とは言えない。まだ見ぬものだからだ。でも、まだ見ぬものに触れたとき、そのあたらしさに気づく自信はある。自分も書き手のひとりとして、つねにそれを求めているからだ。

2005年『対岸の彼女』で直木賞受賞。ほか、『ロック母』で川端康成文学賞、『八日目の蟬』で中央公論文芸賞、『紙の月』で柴田錬三郎賞、『かなたの子』で泉鏡花文学賞、『私のなかの彼女』で河合隼雄物語賞、『源氏物語』の現代語訳で読売文学賞、『方舟を燃やす』で第59回吉川英治文学賞を受賞。最新作は『明日、あたらしい歌をうたう』。

川上 未映子　*Kawakami Mieko*

小説を書く動機と方法は何であってもかまいませんが、「いま、自分じゃないと、この作品は書かれることがなかっただろうな」と心から思えるものを読ませてください。当然のことながら「一般的に素晴らしい小説」というものはなく、「その小説が固有に目指している素晴らしさ」があるだけです。楽しみにしています。

2008年『乳と卵』で芥川賞受賞。ほか、詩集『先端で、さすわ さされるわ そらええわ』で中原中也賞、『ヘヴン』で芸術選奨文部科学大臣新人賞および紫式部文学賞、『愛の夢とか』で谷崎潤一郎賞、『あこがれ』で渡辺淳一文学賞、『夏物語』で毎日出版文化賞、『黄色い家』で読売文学賞を受賞。